

金町駅周辺の景観要素の抽出

- 建築的 intervention の適応可能性 -

宇野研究室

4110038 今野 隆史

1. 研究背景・目的

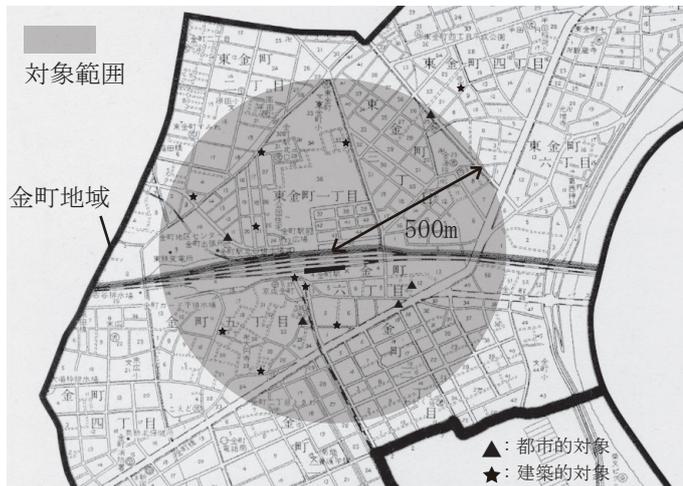
現在均質化されつつある現代の都市景観からその土地の特徴を感じる事が難しくなっている。その結果、地域のアイデンティティが失われ、建築的多様性を生み出せなくなった。一方、建築的 intervention、その土地の特徴を都市景観から感じる事が出来れば都市のアイデンティティが確立され建築的多様性が保たれると考える。

本研究では東京理科大学の新たなキャンパスの立地する葛飾区金町を対象に、その土地を定義出来る要素を調査し、金町のアイデンティティを明らかにし、建築的 intervention への展開を図ることを目的とする。

2. 研究対象と研究方法

2-1. 研究対象

JR 常磐線金町駅を中心に半径 500m の範囲の建築、道路、区画を研究対象地域とする(図1)。その範囲内で15件(都市的対象5件、建築的対象10件)を選定する。対象は、貝島桃代・黒田潤三・塚本由晴の「メイド・イン・トーキョー」における、『文化の薫る「建築」ではなく、事物としての「建物」である。その場所にある要素を可能な限り利用しながら、即物的に組み立てられているのである。コンテキストや歴史性といった回路を経由して、文化的解答が導かれるのではなく、経済効率の高い解答が最短距離で導かれる。』註1)に当てはまるものとした。



▲図1 対象範囲註3)



▲図2 各年代の都市計画図註4)

2-2. 調査方法

対象地区を歩き、都市と建築という2つの観点から金町の特徴を構成する要素を採取(サンプリング)調査する。

- ①建築的対象: 建築物単体において特徴的なもの。
- ②都市的対象: 建築物のまとまりにおいて特徴的なもの。

3. 葛飾区・金町の概要

3-1. 葛飾区の概要

区全体が平坦で低地に位置する。近代以降は、東京の下町的存在となった。大小河川が多い。

3-2. 金町地区の概要

金町は、鎌倉街道や江戸川の渡河地点という交通の要衝で町場として栄えた。高度経済成長を機に、人口増加のため過密化・住宅難・交通難・公害などが起こり、江戸時代以降の農村のたたずまいも大きく変貌した。しかし近年、人口減少が著しい。一方で、ゆとりが生まれ暮らしを改善するため、親水公園の整備やまちづくりが行われている。註3)

3-3. 都市の変遷

図2より、昭和22年から平成8年の都市計画図を見ると金町駅の北口が大きく開発されている。昭和42年4月に新たに北口が開設され、当時、住宅化が進んだことにより、南口だけでは乗降客をさばききれなくなったためである。さらに、昭和43年6月には金町駅北口の正面に日本住宅公団により、15階建ての公団住宅が完成した。註5)

4. 建築的 intervention

4-1. 意味 (intervention)

辞書によると、介在、干渉、介入という意味である。建築的には、古いものに手をつけず基本的には新たな箱を入れ子状に挿入することである。または、その方法。

4-2. 事例

a) 世界の intervention

Peter Zumthorが2007年にドイツのケルンにある聖コロンバ教会に対して立て替えを行い、大司教美術館を完成させた。その際、既存の壁面を生かし建築内部に遺跡展示の空間を設計した。また、建築内部にゴッドフレーム・ベーム設計の”廃墟の聖母マリア”のための小さなサクラメント・チャペルを intervention した。註6)



b) 金町の intervention

金町駅前通りにある駐輪場である。建物の前後の通りに開口部があることが特徴である。この特徴に注目して intervention を行うとすると、単一の区画で整備された道路を建物内で繋ぐことも想定できる。駅前道路から奥の道路に人を導くことを建築的



interventionによって提案できる余地があると考えられる。

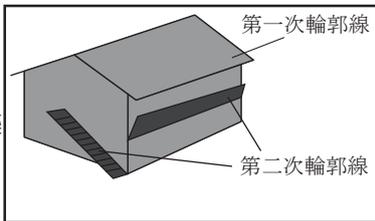
5. 建築・都市的対象による分析・考察

サンプリングした15件に対してカテゴリー(建築と土木)、構造、使い方(住宅と店舗)、第二次輪郭線^{註2)}、建物の機能、駅からの距離、印象を分析図にまとめる(図3)。この調査により、各対象の要素を言語化する。また、カテゴリー「ON」を単体、「OFF」を複合。構造「ON」をモノ、「OFF」をハイブリット。使い方「ON」を単体用途、「OFF」を複合用途とした。このように、3つの項目によって系統図にまとめる(図4)。

5-1. 建築的対象の分析・考察

建築的対象である10件を構造と使い方に関して分類すると図4のようになった。「カテゴリーON」、「構造ON」、「使い方ON」または「OFF」に偏ることが分かった。また、対象とする10件には、建物の外形から外に溢れ出ている要素が見受けられ、それらが第二次輪郭線を形成していた。図3のNo. A-5は、階段と看板の即物的な組み合わせの建物である。

以上2つの視点より、建築的対象において、第二次輪郭線が特徴を表す要素の一つであることが分かった。「植栽」、「設備(階段)」など、要素の内容は異なるが、建築的対象において、第二次輪郭線に注目することの必要性が認められた。



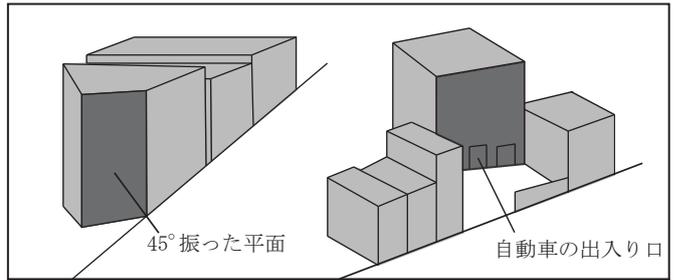
▲図5 第二次輪郭線の例

<p>No. A-5</p>	<p>構造: 木造 使い方: 住宅、居酒屋 第二次輪郭線: 看板、設備(階段) 駅からの距離: 330m 建物の機能: 住宅、居酒屋 印象 近くには商店街があるため、周辺には1階が店舗、2階が住居が多い。上下階で所有者が異なる場合があるのだろうか。</p>
<p>カテゴリー: 建物</p>	
<p>No. U-2</p>	<p>構造: レール、鉄骨造 プレキャスト造、木造 使い方: 歩道、駐輪場 住宅、店舗 第二次輪郭線: 看板、提灯、置き看板 駅からの距離: 100m 建物の機能: 居酒屋、理髪店、住宅、駐輪所、接骨院、飲食店 印象 店舗、住居、駐輪場など多くの要素のものが並んでいる。しかし、そのにぎわいの空間を線路により分断している。</p>
<p>カテゴリー: 鉄道、建物</p>	

▲図3 研究対象の分析図の一例

5-2. 都市的対象の分析・考察

都市的対象である5件を分類すると図4のように、「カテゴリーOFF」、「構造OFF」、「使い方OFF」に偏ることが分かった。都市的空間が加算的なものと感じることが、金町のアイデンティティであると考えられる。また、図3より、一つ一つの事例を見ると通りに対して垂直に開口部が設けられているわけではない(図6)。図3のNo. U-2では、敷地の関係により看板と開口部が通りから45度振った方向に設けられている。加算的空間と、ファザードの多方面性がアイデンティティであることを強調する為に、通りとの関係に重きを置いた建築的interventionを行うことで、金町らしい街並みを景観の中で強く感じることが出来るようになる。



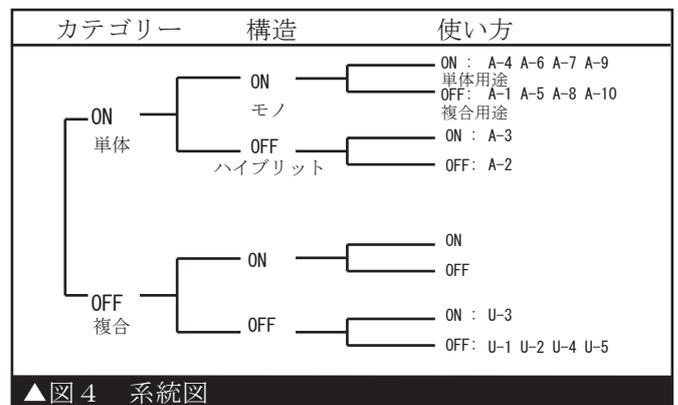
▲図6 敷地の通りの関係の例

6. 結論

- 金町駅周辺における15カ所の対象調査により、
- ①金町らしさと考えられるアイデンティティは、都市的対象と建築的対象とは異なるということが分かった。
 - ②建物の第二次輪郭線「植栽」、「設備」、「看板」の要素内容が与える印象が大きい。経済的効果を保ち、建築的提案を行う必要性がある。
 - ③建物と土木(道)の関係性を考え、最も適した面を強調することで、都市の景観が保たれる都市的提案が出来る。
- ②、③を考慮してinterventionを行うことにより、金町という土地のアイデンティティが景観の中から感じ取ることが出来るだろう。このような事例を増やし、各都市におけるアイデンティティを建築の観点から保っていくことが望まれる。

7. 展望

この研究では金町地区に限られた範囲である傾向はつかめた。今後の課題として他の地域との比較を調べることと、実際に建築的interventionを試みることによって違った見地が得られる可能性がある。



▲図4 系統図

脚注: 註1) 貝島桃代・黒田潤三・塚本由晴「メイド・イン・トーキョー」p12より抜粋 2001 鹿島出版会 註2) 参考文献 芦原義信著 岩波書店『街並みの美学』2001 註3) 参考文献 葛飾区郷土と天体の博物館編集「かつしかの地名と歴史」2003 註4) 参考資料 葛飾区役所『葛飾区都市計画図』昭和22年 平成8年より 註5) 参考文献 東京都葛飾区役所発行『葛飾区史 下巻』昭和45年 註6) 参考ページ KENCHIKU 世界の建築は今 No.49 洲上正幸 2009年11月更新 註7) 高速道路とデパートの複合建築を例にすると、そこでは上での自動車交通と、下でのショッピングは同じ構造体を共有しているだけで、カテゴリーも違うし使用上の関連も一切ない。つまり、カテゴリーが不一致(建築と土木)OFF、使われ方(高速道路とデパート)OFF、構造(RC造)ONとなる。